

言語学ゼミナール XVI(2010.04.03)報告  
(MULTILINGUALISM - 2 : 扼殺された善意 1)  
--- 『ソビエト的北方』1930-1935 について ---

多言語社会への夢が強大な国家権力の力で扼殺された例があります。ナショナリズムが多言語社会にとって政治的にも精神的にも一番こわい障碍であることは前回もみましたが、20世紀の壮大で悲劇的な実験であったソ連型社会主義では巨大な政治権力がその創生期に善意の青年達の多言語社会への夢を根底から破壊しました。

ロシア革命後のごく短い時期に、ロシア共産党（後のソ連共産党）の中央委員会幹部会常任委員会に附属して北方少数民族協力委員会（略称：北方委員会）が置かれたことがありました。この委員会は1924年6月に構成され、1935年の夏に解体されたのですが、その主な任務は、第一に北方地域におけるすべての国家機関に指令を与えること、第二に、地方の労働組合に統一的な指示を与えること、そして第三に、「北方諸民族の慣習とその状況に関して正確な情報を得て広範な出版活動を行うこと」とされていました。とりわけ「原住民ソビエトなど原住民組織の指導性を高めること」がその主な活動方針となっていたことに注目したいと思います。この委員会の第1回全国大会は1924年10月に開催されて、当面の活動方針が決められましたが、その第一は、原住民幹部の養成であり、そのための機関はレニングラード（現サンクト・ペテルブルク）国立大学の労働学部（後の北方学部）であるとされました。この委員会の具体的成果として、後の統計では1925/26年から1929/30年に全北方地域で原住民学校が6校から123校に増加したと報告されています。その教師や医療指導者を含めた原住民幹部は、1929/30年には北方学部卒業生だけで325人に上ったともいいます。

北方委員会は機関誌『ソビエト的北方』を刊行しました。しかし革命に伴う内戦と干渉戦争のためにそれが刊行されたのは1930年からでした。原則として2ヶ月刊とされていましたが、決して定期的に刊行されたものではありませんでした。しかしその記事はどれも刮目すべき内容で、例えば、原住民はそもそも何語で教育されるべきなのか、原住民語はラテン文字で表記されるべきで、そのうちにロシア語そのものも国際化されてラテン表記に変わることだから原住民語ははじめからラテン語にしておくべきだなどの意見が公的に論じられました。

しかしこの自由で理想主義的な論議も長くは続きませんでした。1926年にはソ連初期の民族政策に決定的な影響を与えたレーニンが死亡します。その翌年には彼の盟友であったトロツキーが亡命を余儀なくされます。それとともにスターリンの個人崇拜と支配権が一気に高まりました。象徴的な事態は、クラークとよばれる農村富裕層の問題にも見られます。北方学部の自由討論では「クラークをどうするか」というアンケートにたいして「自分の労働で生きている限りは生存権を奪われるべきではない」という意見が公表されたのですが、スターリンの政策では1928年にはこの階級は全面的に撲滅されるべきであるということになっていました。事実、アムール下流のニヅフの村でもクラークと名指されたものがこの年に処刑されました。1930年を超えるとポップ学部の指導者ボロラス＝タン教授のチュクチ語教科書にも言いがかりがつけられるようになります。そして1934年に起きたキーロフ暗殺事件が一気に流れを変えます。1935年末に刊行され

た『ソビエト的北方』3/4 合併は北方委員会主任スミトビッチの追悼号でしたが、同時にこの雑誌の廃刊の通告でもありました。『ソビエト的北方』は次号から『ソビエトの北極』と改名されるというものでした。しかしこの新しい雑誌『ソビエトの北極』は、原住民とその地域における新しい生活の建設、医療や教育の向上のための政策とは全く無縁で、この雑誌の任務は北極海開発に関する技術・政策にありました。こうして北方委員会も実質的に解体され、その機関誌『ソビエト的北方』は第6号で生命を終えたのでした。この間のもう少し詳しい経緯は配布した資料『ソビエト的北方』と『タイガとツンドラ』のことなど(ナウカの「窓」雨宮潔編 通巻111号 1999.12刊)にあります。この雑誌も廃刊になりましたので、金子のHPを参照ください。

今回はここで話しが出来なかったもう一冊の雑誌『タイガとツンドラ』について報告します。

